（第３種郵便物認可） 日本教育新聞 2022年（令和4年）7月25日（月曜日）

特別支援教育

高校での通級指導 2年で2.6倍、1296人に

文科省調べ

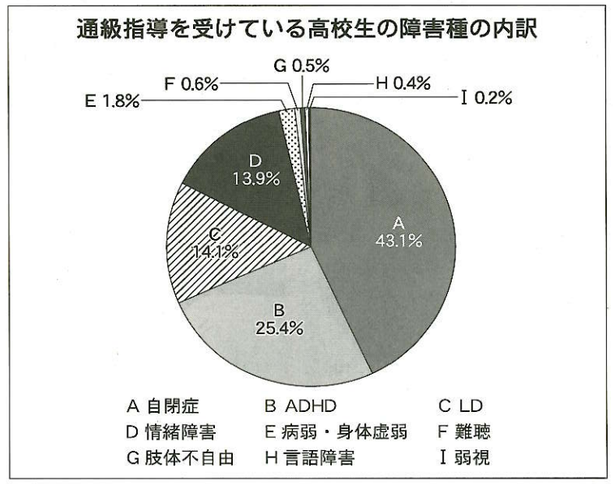
高校で通級による指導を受けている生徒は制度が始まった平成30年度から2年間で2・6倍にまで増えたことが文科省の調査で分かった。令和2年度は2396人が通級による指導が必要との判定を受け、1296人が指導を受けた。判定を受けたものの対象外となった生徒は半数近くに上っている。「本人や保護者が希望しなかった」が主な理由。通級指導を受けている小・中学生、高校生の合計は16万4693人で過去最多を更新した。

昨年3月末時点の状況を調べた。これまでは5月1日時点で調べてきたが、年度途中から通級による指導を開始する場合があり、通年の実態を把握するため、調査時点を改めた。

令和2年度に通級指導を受けていた高校生は、自閉症が558人で最も多く、ADHD（注意欠陥多動性障害）は329人、LD（学習障害）は183人と続いた。

通級指導が必要と判断されたのに対象とならなかった生徒の数は1100人。主な理由は「本人や保護者が希望しなかった」が多く40・8%に達した。「加配がつかず、巡回通級・他校通級の調整も出来なかったため」（16・5%）、「特別の教育課程の編成や時間割の調整ができなかったため」（7・4%）が続いた。

都道府県別の内訳では、公立高校在籍者に限ると、兵庫県が116人と全国最多。最少は栃木県の2人だった。他に9県は1桁にとどまっている。



公立高校で通級による指導を受けていた生徒の人数（令和２年度）

北海道	32	滋賀県	3
青森県	30	京都府	37
岩手県	5	大阪府	23
宮城県	23	兵庫県	116
秋田県	6	奈良県	13
山形県	9	和歌山県	25
福島県	5	鳥取県	15
茨城県	8	島根県	29
栃木県	2	岡山県	35
群馬県	36	広島県	15
埼玉県	18	山口県	9
千葉県	15	徳島県	7
東京都	17	香川県	5
神奈川県	28	愛媛県	43
新潟県	59	高知県	26
富山県	20	福岡県	69
石川県	10	佐賀県	18
福井県	47	長崎県	58
山梨県	11	熊本県	36
長野県	14	大分県	35
岐阜県	24	宮崎県	32
静岡県	69	鹿児島県	18
愛知県	29	沖縄県	37
三重県	14	計	1,235

特別支援学級担任の免許保有率増える

全特協調査

小・中学校で特別支援学級や通級による指導を担当している教員のうち、特別支援学校教諭免許状を保有している割合は昨年度約4割で、1年間で約1・3倍に増えたことが分かった。一方で特別支援教育を受ける児童・生徒の増加は続いており、調査をした団体では、新たな専門の免許状の創設を求めている。

調査は、全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会（会長＝喜多好一・東京都江東区立豊洲北小学校統括校長、全特協）が昨年8月から9月にかけて実施した。全国の「知的障害」「自閉症・情緒障害」の特別支援学級、通級指導教室を設置する小・中学校と義務教育学校を抽出し、計1698校の校長が回答した。対象とした全校から回答を得た。

設置学級別の特別支援学校教諭免許状保有率は、知的障害特別支援学級担任が39・9%（前年度29・2%）、自閉症・情緒障害特別支援学級担任が38・2%（同27・3%）、通級指導教室の主任が42・2%（同31・4%）でいずれも増加していた。

特別支援学校での教職経験についての設問では「ある」と答えたのは、知的障害特別支援学級主任は17・6%（前年度18・1%）、自閉症・情緒障害特別支援学級主任は17・5%（同15・6%）、通級指導教室主任は15・1%（同17・3%）だった。

校長自身の特別支援教育に関わる教職経験を尋ねたところ、特別支援学級での指導経験を持つ小学校の校長は23・1%、特別支援学校の経験は9・6%、通級による指導は4・7%だった。

中学校では、特別支援学級の指導経験を持つ校長は19・0%、特別支援学校は6・5%、通級による指導は1・9%だった。

同協会では、より多くの教員が特別支援教育の知識や指導方法を身に付ける必要があるとして、特別支援学級や通級による指導を担う教員のための新たな免許状の創設を検討課題に挙げた。国や関係機関に働き掛けていく、としている。

各学校が研修により向上させたい教員の専門性も聞いている。「多様なニーズのある児童・生徒（複数回答）が多く、次いで、担任の特別支援教育力とする回答も多かった。

他に「特別支援学級の編制基準の見直し」「定数の改善を求める」などがあった。

端末持ち帰り 活用状況は

調査では、昨年度の配備された1人1台の活用状況などを聞いた。

知的障害特別支援学級では「普段使わせず、学級等で使用している」が「児童・生徒が毎日の宿題や自主学習で使用している」を上回った。

ペアでゲーム、一緒に喜び励ます

自立活動 どうする？（33）

横浜市立桜岡小学校個別支援学級の取り組み ㊥

本年度は知的障害個別支援学級2クラス、自閉症・情緒障害個別支援学級2クラスの4クラス編成となっている、横浜市立桜岡小学校の個別支援学級（特別支援学級）。教育活動全体を通して自立活動を年間計画の中に位置付け、指導を行っている。

8日の知的障害個別支援学級では、「『手先の巧緻性や持続性を高める活動』を指導するクラス」と「『心理的な安定』『人間関係の構築』『コミュニケーション』など多様な指導課題を設定したクラス」を設定して自立活動を実施した。

定年退職後も再任用され、非常勤講師として特別支援教育に携わり続けている大ベテランである本多茂子・非常勤講師は、「『心理的な安定』『人間関係の構築』『コミュニケーション』など多様な指導課題を設定したクラス」の指導を担当した。

これまでに、子どもたちは、ボウリングやいす取りゲームなどを行い、「楽しくゲームをする」経験を積み重ねてきた。これを踏まえて、今回このクラスで取り組んだ活動は「ハートとハートがつながるゲーム」で、友達と2人ペアになって取り組むゲームに挑戦した。

ゲームを始める前に、本多講師が「みんなの合言葉」として「ゲームは楽しいよ」「勝ったり負けたりするよ」「泣いたり、怒ったり、いじけたりしないよ」と目標を提示し、「成功したら『やったー』と、喜ぶよ」「失敗したら『大丈夫』『ドンマイ』って声を掛けようね」と子どもたちに伝えた。さらに、本多講師は「みんなが（学級目標でもある）スーパーヒーローになろう」と、一人一人の目標が達成できるように意識を高めた。

最初に行ったのは、輪投げゲーム。床に設けた10本の棒に向かって輪を一人5回ずつ投げ、入った数が多いチームが勝ちになるという内容だ。ペアは子どもたちの相性や人間関係などを考慮し、本多講師と他の教員で考えた。

ゲームが始まると、子どもたちは真剣に的となる棒に輪が入るように投げていく。自分の投げた輪が入ったときには「やったー」と喜んだり、入らなかったときには「残念」と悔しがったりする姿が見られた。ペアの友達が輪を投げるときにも、応援したり、入ったときには一緒に「やったー」と喜んだり、失敗したときには「大丈夫」「ドンマイ」と声を掛け、励まし合う様子があった。

時間がたつにつれて、他のチームの友達が失敗したときにも「大丈夫」「ドンマイ」の声が飛び交い、クラス全体に温かい雰囲気が広がっていった。

ゲームが終わり、各チームの成績を発表する時に、一人の児童が「やりたい」と立候補した。その児童は、各チームの成績を発表すると同時に、勝ったチームには「やったね」「頑張ったね」、負けたチームには「ドンマイ」「大丈夫」などと声を掛け、みんなの頑張りをたたえていた。

アプリで広げる 子どもの学び 〈15〉

Googleレンズ

印刷物障害（Print Disability）という米国で使われている言葉があります。この障害は情報が紙媒体でのみ提供されることで生じる社会的なバリアを指します。紙に書かれた文字を読むことができない視覚障害・読み書き障害・知的障害のある人、本のページめくりや持ち歩きが難しい肢体不自由の人など、さまざまな人が印刷物障害を経験します。

印刷物障害に対しては、デジタルデータなどを提供することで情報を音声で読み上げる、ページめくりができるなど生じるバリアを小さくすることができます。しかし、紙の印刷物に対して常にデジタルデータがあるかといえばそうではありません。デジタルデータがない場合はどうすればよいでしょうか。

今回は画像から文字を抽出するOCR（光学文字認識）機能を持つ「Googleレンズ」を紹介します。Googleレンズはカメラで撮影した画像などから文字を抽出し、検索、テキストを読み上げ、